清良記

十三之
十四上

農商務省
圖書
第一共
號八三一五
冊五

和書
門
類 八三一五
號 二〇九
函 六
架 一
冊 五

内閣文庫
和書
類 八三一五
號 二〇九
冊 一五
函 一
架 一

内閣文庫
番號 和 8315
冊數 15 (6)
函號 151 126

和史 共十五

国立公文書館
National Archives of Japan

清良記巻第十三目録

一　土佐一条殿家臣の事
一　自豊後猥藉の事
一　土居ゝ土佐一子出の事
一　土居殿記初侍の事
一　之山井系縁組の事
一　家内武略の事
一　一条公義士佐一降参の事
一　清良城代合戦の事
一　土居九兵衛討死の事
一　横井武義勇合戦の事
一　土佐帰陣の後の事
一　法花津殿寄四信綱清良出国の事

一　多田古屋敷之事

一　清良記の内の殿へ訴言之事

一　中野市六事伊予田公義改易之事

一　一條殿と西園寺殿和睦不調之事

一　清良記心得之事

清良記巻第十三

土佐一條殿家評定之事

一　永禄四年之頃近年四国之史所載之事我老本一冊

徒行記出之事那也百枝新兵衛尉之親類為只今の支と枝又

房家に支族也我恩を仍て如かく人となりしを通く牛例

事を為を為に家子之支云て不及新兵衛尉之親恩を

云也上り為家我敬ふて心底を為を抽忠敬さ

蓮池を事親為とて伊与の云間を忘れ

うく没之親を対治せく きと思ひ彼の云而を事を

為を明りうくいけんとを別の子細為一紙子為の

に拾清良一多の武功ようく伊予の首為不調是神慮へ

人と為るうちうち之親次第事夢を与矢取度事を為書面に

四郎子及相助たり此之為長と和睦しく為接をひく之

親を亡きんと思へども左程迄に度々面目を失はん
さ一度も軍を利かず一時に降参仕たれば他の雪入を脇ヶ浜男と家の面目を失ふ
と嘆しかども迄一度日本の仕返しの軍を傍観し味方利を
ふ小諸の以後迷ふ左ふ様にと思ひ清良之半法人と
なりて西家を乗り来り此度は有り時に言ひ義家朱と
いへども代々武功の家に生まれてさる次の子孫なる故信
を振ふべき為に義を尊び武を励む事人に勝れたる也必
信者賢を以て初の謂なれば叶はぬ書家法人是を嫌ふ者
多かるべきと思へども理非分明なる事なれば
云へども始終六ヶ敷事なるべし一生一度の事
なれば又当国五ヶ三間一体生涯のものなれば
是を讃一四ヶ国清良御難なれども彼も当家
我恨を旦は先度と西国家数代の敵なれば清良祖父父
一族皆石塚なれば義秋の為に ささ ん 言出不少
連ハ当家又義秋得失しかも先後なれば一味の事西国家
なれば末の旅既彼と云ふ清良と云ふ当家を皆子全之余
似是候前なれば云ふ一家を一度思ひ一生を保ち清良
も主家を去るの心なきなれども家中の半族
く潜搦ふる記ふ如く嘲ふ敵ふなる国吊と云ふの
ふ別しく時呼ぶ思ふ而為ふ如いふ思ふ
ふ時ふ一時あ孟左京進訴て来る一は花五種付の法
種の通清良十七年ふ宰人一は当家より来り二ヶ年の習
又中ふ高者の生ふ ふ行ふ四は当家の家の京中
ふハ各別の器量者ふ我を為ふ一卿ふ迷ふ
きと理屈を言ふ明文の文ふ礼儀を以敬様清良婚近

以家門安堵の姿なるに而ぞ一日心ゆき難く程なく
高く亜ぐるを川之清長へ時に矣四を加へ之を清長の家
臣皆歴々面目旨大の事なり父祖没後の御為人の
中まく探し出清長の身屬中より清長を
一とも仰ぐを交ぐるの習ひ武家の富貴なれば旦
暮に武勇を第一とし不忘也つる日常ものを
こと拙言之とも老功の者ゆ十信一たる御所しる梅
檀を二株ゆ芳一盛一尺余に成しを清長
ゆたる事ゆく山初出へ之れ此時を事を強きゆ
ゆとも此迄男山性高山中彼を敗績をせ見て終る弾
きを以へ之を集と申へ者ゆ人を存せ一也へ
剣契約仕掌ゆへ及家を成ぬ一ハ只を
慶しの矣と成く数度の意ゆ名の為此仕業此者へ

傳ゆし毎州の様子態と承へ西国平家ゆし若子の内
右不及中老功の面しゆ清長右婚ゆし毎命ゆへ右肩を
附ゆ之の為に考度ゆ先後事出の大敵と合戦仕るとい
ふも山四と集毎人又吉陵と合戦のかし人数を討せ
ゆ為ゆ絶ゆ危を働き一度ハ敗ゆ利を降き強きを破見係
御帷幕の間ゆ免ゆ〳〵勝ゆ御面里の為ゆ賞ゆ眷ゆ
く士卒を之ゆ事相ゆ者ゆ〳〵と皆人舌御振ゆ中せ
ゆ公廣の股肱を為ゆ之ゆ若ゆく書明ゆ方ゆ〳〵信方の
大敵を川ゆ中ゆ〳〵敵ゆ降ゆ国を保川ゆ西国ゆ
限ゆ川ゆ清良の武勇ゆ之ゆ西国ゆ只今
免加場ゆ〳〵殺御所ゆ何時ゆ地戦ゆ女百騎の勢ゆ不足
なく之を以所内右を始め土民百姓等ゆ到ゆ之他家の武
士ゆ婚ゆ事ゆ之ゆ清長へ加勢一敵を仕ゆ

一て他国より楚忽の軍を雖家と云ふ以来宇和郡より内
さは山他と云ふ合戦なること〳〵十六ヶ度に及ぶ
此度元親と雖も強し大内もれいこいと云ふ清良武
と申を大軍引く所押寄せ味方若手討れ多のうも終
さいかりに入のしとも元親は南家を疑ひ申さんく他人
との逆心を拵と見へて清らを彼と一味して南の山利遠
る毎例を攻伏ふるこうを世伯の申さうく大軍打て寄る
そうはうとうやうし切角伊予をたにのられ布く元親
も奈きを人事者を彼の孫の家を此方より合せ清良
うるの出仕行を元親ことれ不申用る毎所を国を元親
を攻亡ものまて〳〵ものはうふ伊予を清良申す所一
申出を清良申かの〳〵元親も接見と〳〵い逆を元
親を亡不一安く云ふ彼も遠年仕出面くを云と朋友傍

掌を拍翁一已うもう腐一夏秀ふ〳〵少と所名心底を根を合
之情をなけをといふ者一人も うもれと不及力修条を
白計なり給きハ今若山出方と元親は退治といい、不
拓ふ山味方を純集るものを怪を吟風を学本の麗くうさ
ふく戦命一紛ふを元親の亡ひるんを時日を過らんて
ふ内し儲方が竊に此事を新ひ粗内候仕者も方くいと
布京理を元〳〵申付小少を学家の思案をし形ふを
ふ紀と見へて人この吳見を内らんるのふ何の評定も意
を沙汰ふのりしゆへを東のさうく一条家の家老佐伯
信濃を芸家を肯き元親を拵ひを郎を元親計策
深紀夫なのく賊謀(タブラカミハカリ)さうふ〳〵一一元一条家を乗ふん
疑ハしくなりて行を遣の不穏端ふらんと心何るさ
いく眉を蹙めもう〳〵と高遠義郎ふ古一のい性土佐より

見の出けく反覆方へ指越申し候を家人の者共記置
候のこと

豊後より狼藉のこと

永禄十二年巳巳四月始一条家門より発足致し候
所に数艘押渡り宇和郡浦々へ乱入仕り候
所に土佐より五百人程陸に上り候
陳の条は敵方へ取合申の鉄炮を放一番に河原の
石仙を撃ち鉄炮放し打合せ計して
三日より掛り申候後撃と申候
かく者仕の物多御考無御坐候
諸民仕候毛を失ひ人足路を不絶
土佐より土佐へ多きのこと

同年八月廿六日土居義人同左衛門桜井武義を大将
百余騎勢を率し土佐より家地一所へ寄せ士卒数国
りとく立て放火し稲を刈取人とし
る者を切り
狼藉
いうに敵
いいう
多
土居家
武義
土居
同左衛門

不便さに狼藉をもなすべきと山内を通行する仁人無さい
ひきうのもとゝ恐らんとして新宮衆よりもせく咎る清良を
多勢を以て打ちもらさじとて狼藉をなるに
も心有つきすりて八十郎義行金蔵野十郎なとも是迄
能勢〳〵にして三人を賞さるの命の收在りて九月より
極月まで丸一ヶ月は一度宿なし土佐堺まし来の
衆度も前のごとく狼藉をせずして川を渡こと
土民なども心あくまで思ひ迷ふなるまく茶なと賣し菓子やう
のもの調行さうに川しなとの那一郎なとの所望のごとく
思ひ出すとけ御頂戴なる土佐方の時者なりと語るなる
うしうは出来者もを屋敷出来仕掛一ヶ所せて拵
うつり申る

土居外記初陣の事

其年も暮て元亀元年庚午正月十三日吉日なりとて清良
の甥土居外記初陣として横井武蔵同又左衛門五郎木河原を
出原彼是雑兵合なる百余人寄立河原渕を通り又ハ家地一
押行河渡と打入れ近辺の武士宮内そこの峯殿の河
内より弓鉄砲少し打合けれ共無勢なれ共打勝
ものやうもなく逃矢計なり依て引
又ハ家地へ向一ヶ浜ハ左ハなと云ふの衆清さ能き菓
子食物を拵差出さるに被官なるの古くなるに
なこまく西人の者又左衛門ようの小十六日大森一来
り又左衛門取次を以て清良彼宮ま対面けりと袋膜一引
出物とらもとく咎さる事度なるの内ハ
吟合せ果迷惑ふもなるに上思ひの丹波ほを一ヶ所ふ
弥能ま宮御ひ彼地の横子矢なりなもやく咎へり

上山井京師組の事

如く法華寺と土居の元成寺首尾ちくの魂
なりしを護聖寺の住持の嘆き矢ノ仙寺と以ハ侍一条家
よりきしかいう成子細をもちや土佐を宰人しく土居の元成
寺を焼くり 時住寺行恵を以て上山為方内むをめを叶
京丹後方へ呼向へそれより後上山方不所しを内こわ清
良出寺ハ物ハくを何時ともを侍不仕と云合せを後ハ
弥土佐ノ上山方山へのをつひ自由になりて当手六七
月より名橋を越て歩入といへども道の極をかも危うく
を此手研意恵ある人を敵方ともなをを働入なくを実
ひをわと出法しをれて上居を自勝せられしを子細を彼
地を放火しを式を人を数ををいとあきをを何すと
く小城一二ヶ所を伊毎より拵望へき所を何ノ仕上佐よ

りて足場能伊毎より を切不検証の道なれハ後佐上へき
役をなしをを上羅院西国を殿頃日を書を後を大事の事き
河りく深田中堅河京閑の加茂神さく皆呼向され寄より
依く土佐口の寄手をあし清良のかりて騎言の百をも彼
地を羅を入き多根ゑく紙ハ仕人をも楯つハハ下ノ上相
順して 罷出りを一人を不可数をを生家一宇も不破盗坊
狼藉をせ仕云手を上佐より伊毎へ度く打入伊毎方を
佐を刀ノ上れを成を有しかをも今ハかく伊毎より上佐ノ
へ毎度打入事清良の武略ゆへ之ハ也を欲国の諸氏ノ
川く伊毎を長頁をるハ是悪紫ノく民を若しを免れ仁義を
明をを防ハふれを不戦しく勝の謀をを河ふを辛
光を磨くをのりを武勇とハいひくを生ハ碑を利を
和ハ治をを光をの武意ハいひしを武の字義をを叶ハ

を止とも僧つゝ一日道理なるもとゝ口を信じ妬(ツチミシル)嫉
業なる云説を所なるもとゝと清良い者を学に入をしもと有し
を西園寺家の若侍を習の者ともとりゝに清良武威の酒
こゝに一くらだに採つゝ者なく加増をもしく大名な
も成つき人なんとも思ふ驕高人を人とも不思弥
なれをいつもいを成取をもく赤くさも類似をうゝへき事実
山なり抓 極云族角りもとも北九州筋学云事系なを
前代のるを番石知先清良又祖之代の男と他を角見付来
きかもとを拔込もあくて色不叶事なりて出あを紙なり
なをを左いを殿事を様を所のあ一仕
学西園寺殿いをゝ古西ゝ時の始世男名なりしに角
四の古屋刑部とを者武名を学ゝ所系仁義の第(三カ)士をを
勅命を重一家を種一を二の時方と来逆徒を退治一を

後刑ア死をく又を子孫出後武勇少時しを西園寺家の相伴
棟梁なりと学給ふを実之仁の若殿系をれを妹を為し後
云一をれとも用ひ給をれ者といゝとも古屋宗林世
百酒を主と思ひ我子孫をもを訪を続を氏郎四宇和宮子息
を養子をを今の信孫の父虎綱をゆをり宗林を山北を
行をを武士弟を代く芝ゝの家なれい我一入巻を入魂を
一を故仕を主殿角殿を主を幼耳を学を今をを迄
を此法を主出をを黒沢殿の若殿系婚を人を婚入(ヒキ)出
角り久枝なを角を若世男をを出を姫を当家を君事お
来をを一と思ふを城を天を誕出(ヒキ)をるなを一系家を
殿ゝ出を主を清良修成人教をを高家探迄氏依し出
州東小路法行のを一牡系を

広廉の世を一日れを所の行川きれを

一糸二文の稽はとぐうを
と儲ける歌方まを清良まをと亟事歌物語り又須日
度のを習宜ようとくとく
注ぐ為めに古為免り歌をさるまること
に何ぶとをいう、何るへき
土居方九るの迄
膳へを歌さへ土居まけるまること
犬は仰たらへ人を犯を
かやうにるの古堂言他遠ぶ言く来る世自清良ふきて
さを波えてを風るとさるを書をは一るも異家服一
出仕の初或は城下市町なるとるく土居家の天者まけを
ろ一酒るも上級学ぶを嫌いまり一不理屈成子るを仕
おを一ゆへるを書て仕古勉ぶ一れ西四まく土居家の天天清

良存外なるゆへやと迄也所うるあ宜とな紀名を立已き
らい膳一うる事を不云一く頁服を立く雑是ハ下簡の事
ゆふを不足るも皆上とりめはの仕方なるゆ一まを下ん
く同一を習宜云思意稽とまを而ぶ法批判一吹日々出仕所
の者とも堂歌と別歌方と一族の縁組をを清良の心底
雑計なるゆふをるく西園寺殿るも疑出来るを出居よは
心安を一と見へうり清良何を逆ぶあら人や若女逆の心
ゆふい三間河原関板路るを所ゆへ人るも一番日まい
迄一宮和中を十日廿日の内まを丁順と他所るを評判
ゆるを少移きるも清良他の誉り人の噂をも少を心よか
事代悪義を書まを世るるを家門武略を事一
ゆき

同年八月始め後土佐国旗あり海陸より出る一方入と風
聞一宿所口へい人数を出し在り海より出る船
浮ひ又へ寄せい動修するより黒船へ後詰を乞ひ出る
一手あれい黒船大小をもの山吾法花津多田信綱之
頃三百余騎にて罷向と何り清良ハ寄日いを手より
来い土佐ハへこを罷向くい一条殿も勇く荒さ大将なり
欲の入来る我ハ分を捨くは庄口一指遣ハ、事を謀も
吉をういめ後罷向百姿とハ也を肖ハ似り物ふい
土佐口を以籠城ハ以ハ行ハ一必下山より欲を責入
る為ハとく言事の監物立百の似水有る能信一云合く稲
をもいらせ信ハをより入させ吉新右衛門尉を大将と
くた三国義人武義を能一遣清良ハ八月六日ハ庄へ寄
打立るとや三日ハ以あらり動修ハ寄軍相拒といへども

そ、ハ数吉とも なくく口欲寄とハ計の様ありけ
れ共ハ表より土佐口長宗我部ハ仕寄ハ本欲
と而法能金寄なと紙三国一ハ以崇のとく家門吾川を
ものい以之親加勢有とハ九日の早ハ押入宗田井野尾木
高長四ツの城を取出て責ハ寄ハ以つれを後詰
を乞ハ西国ハ殿黒長の峯ハ寄ハ分ハ後
詰なハ分ハ土佐勢い城責ハ二陣ハ陣を取望ハ
り土佐より西国ハ殿へ一ツ書を以く言ハ此度清良い
留守ハ以ハ吉新右衛門尉立ハ以ハ分後詰ハ
在ハ以ハ吉吉先陣ハ仕ハ事
一ハ庄表の寄い謀ハ仕方計ハ清良ハ計ハ方一番ハ中
ハ庄表の寄ハ謀ハ仕方計ハ清良ハ計ハ方一番ハ中
ハ庄表の様ハ寄ハ清良ハ計ハ方一番ハ中
ハ庄表の様ハ寄ハ清良ハ計ハ方一番ハ中
ハ庄表の様ハ寄ハ清良ハ計ハ方一番ハ中

山相添て一方術仕尤下山事

一右之間西の武士又は陸路より致而
参る共一合戦可仕之旨申山へ清良方之
下ゟ〳〵ゟ手付ゟ〳〵ゟ指ゟ〳〵ゟ不及申山後詰云
〳〵山へ侍ゟ西計言事へ山迄清良屋敷ゟ新ゟ
ゟ高城へ之籠ゟ浪籠ゟ武士ゟ山籠者へゟ〳〵ゟ山
ゟ侍ゟ立ゟ〳〵ゟ西ゟ一来ゟ落ゟ下ゟ家ゟ事
右同条ゟ山投家ゟ立居家中ゟ西国ゟ敵ゟ〳〵ゟ
ゟ荒角の山沙汰ゟ〳〵ゟ山ゟ入ゟ市ゟ〳〵ゟ
歟ゟ心安ゟ立ゟ敵ゟ狼藉沙汰の張ゟ

一の家ゟ義ゟ伝へ侍ゟ家ゟ
深田ゟ西国ゟ敵へ手ゟ
ゟや水ゟ手歟ゟ防ゟ下ゟ力ゟ〳〵ゟ迄ゟ侍ゟ仕ゟ

かゟ手ゟ方ゟ山ゟ日月十二日ゟ迄ゟ度ゟ注進ゟ〳〵ゟ窺け
ゟゟゟ成ゟ〳〵ゟゟ後巻ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ悪ゟ十三日
ゟ人質ゟ出ゟ深田ゟ去侍へ降参ゟ申ゟ〳〵ゟ
ゟ後詰ゟ紀計ゟ不限ゟ義ゟ恩ゟ吉近ゟ河原渕ゟ
法忠ゟ〳〵ゟ忠ゟ家ゟ中ゟ東山ゟ法ゟ子ゟ物
ゟ毎度深田ゟ城ゟ〳〵ゟ侍へ随ゟ武士
ゟ知ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ一ゟ森降参ゟ後ゟ家ゟ二森
ゟ旗ゟ〳〵ゟ相頃ゟ石原中村ゟ降参ゟ〳〵

清良城代合戦ゟ事

是ゟ依て上方ゟ郡侍ゟ合ゟ〳〵ゟ敵ゟ陣ゟ
事ゟ書家ゟ〳〵ゟ上ゟ〳〵ゟ大将ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ城ゟ十
所ゟ内ゟ敵ゟ一軍ゟ〳〵ゟ深居ゟ〳〵ゟ
間ゟ言事ゟ味方ゟ無ゟ彼ゟ先ゟ〳〵ゟ大将

へいいうゝ云へきいさ人くる者も女童まゝ如き集ゝ一
軍ゝ〳〵しゝゝ老若男女童まゝ如き集ゝ一
ゆゝ分ゝ旗きこゝせ城の禁く折く出る家ゝ清良の姉ゝ伝
宗三後家ゝ女なゝゝ歴ゝ武士の不叶箱略百人ゝゝ新城
の堤代ゝゝ指垂れ〻ゝ武士の女共ゝゝ奮勇
見ゝゝ城の端ゝへ出ゝ武士城少ゝ立ゝ者ゝ示武
新堤ゝ城のむゝ敵の後なゝ敵ゝ分ゝ新堤の方
つゝ向ひゝる敵ゝ指ゝ新ゝ堤ゝゝ
国盛人樣并みゝ家つ みゝ敵中ゝ
りゝゝ中ゝ通一包人ゝ指ゝ
りる相ゝ立火花ゝゝ二撰ゝ撰攻合ゝる時家後ゝ間
ゝ馬著ゝ替るみゝ家つゝ卿人ゝ進ゝわの方へ
混ゝゝ教法ゝ浅抱ゝ井崩ゝゝ如ゝ武義盛人ゝ

衛又八智〳〵ゝ敵ゝ無ゝゝ敵大勝なりといへゝゝ実ゝ
二森へ祇ゝ〳〵ゝ如ゝ新城ゝ
女房ゝ三十人計切ゝ出何ゝ
場ゝ所ゝ中ゝ木源義ゝ
ゝ指ゝ討捕ゝ時女ゝ十八家の時石城没後の刑ゝ又
ゝ後ゝ敵ゝ討取ゝ童女ゝ大づゝ
呼ゝ〳〵ゝ不遠振舞ゝ信人ゝ
目ゝ仇の先風情ゝ源義備ゝ
源義ゝ母ゝ
勝ゝ打殺雑兵の首ゝ合ゝ七十八討取備前ゝ揚ゝ
ゝ居勝ゝ静ゝ川原ゝ河原義の屋所山良衆ゝ四ヶ所ゝ
皆捏へ日暮ゝ後城ゝ〳〵ゝ八ゝ

土居左兵衛夜討付 二宅弐討事

同十四日土佐方より之清良留をと云る謀なるへしと為
と思へしこれ小男くいたる先ゝ二の手ゝ有と雖強者
し若者ほかまも思知らすしたる兵衛と思しきを一定清良
るらんを思込傷りて其日又わく者とる一うちとて
中聖より出ていのうも点より接へ傷うり土佐方より也の
梟へ打おそ日も足軽のせり合計りし蒙より出佐方を
場より出る夜討弐うけて打らしそ出七付元を中ゝ元
親の小性と雪へし三宅角九郎を果名伊賀右衛門討取
うり後ゝ清良を少方より收ひ栗の為と知る敵を見せ
ると戯き伊賀右衛門ゝ既知宛ひそかより高うて奈ゝ
ケリ

楊井武蔵胡合戦之事

扨十七日の明方ゝ胡合戦弦ゝ楊井武蔵
先手にして是の鼻へ打出まも敵方ゝも夜弐ゝ城を発
人として東西南より寄来る所を楊井武蔵ゝ添
て静り我人数を隠し敵を少取り迄一論より聞を作り遠
方を伺ゝ切て無きゝ敵を思ひもよらぬうしろより
近立ら者国章強西の伊田へ馬を乗入川岸へ寄て以
是打為勢貴伊くして東西を弁へ味方のい後を見
ても敵ゝと所を間一さゝとゝ敵寄する弐二森へ伏り
付多里者ゝ合序頃是を見て楊井ゝ人数を多ゝ伏者ゝ
を清良の費之終二三十人見せゝ九其外ゝ人形ゝ
ゝる一一たゝゝ素能信ゝとゝの者ゝ者ゝ
付ゝる一し見れゝ日見中ゝ面内事之年武蔵殿
ゝ老の敵の一若ゝなりしとて安ひゝ武蔵ゝ是を

某ら働ヲ何ら伏清良の鋒芒強く武威あるゆえりて大将の一心を皆士卒の手柄と成士卒の手柄を大将の心より起る事なりとて各息休免ケり

土居帰陣之事付家門後の事

去ル九月ヨリ軍初まりけるを早速味方へ早馬を打せて清良へ注進〳〵ヨリ参きるを以口の敵引ヲさゝ尓出さ打捨くいつに事急なれとく後詰のため西ヲ〳〵きやうあーを思ひてさ程義堂土佐口心ヲとゝかとゝかせーと云おうふ三人何も帰ふきをけり公廣にヨリも之ヲ発行ヲ来しられとも直て朝〳〵ヨる事なれと今度ハ日稲ヲ〳〵注情ハ出をる〳〵以口の後詰引拂をしゆいて敵競入来ル〳〵とて敵て踵を免くをきを以勝修寺ヨリも土佐の橋子閉合セに人ホをヨリあきて彼ホヨリまて多の勝を費ヨヲ云度ヲ恥辱ヲ〳〵ヨ伸ヨリ〳〵多田法毛津ヲ人ヲ頼入ゆと迷ヨリ〳〵ヨリ無ヨい此口ハ拵て為ヨ〳〵〳〵十六日の時ヲ三人寄ヲ法て同日午ヨ刻計ヲ板略ヲて大森の形御ヲ通る細を懸ヲ屏ケ多田法花津を能ヲ藁ヲ嶽を経て桜の内一の奇手を退拂ハ志土ヲ尾ハ越一きて柿原ヲ越〳〵ヨ市ヲ敵ヲ土佐勢ハ中野を攻落〳〵降参さセ之百家後ヲ陣一無勢りして長田西佐ヲ表一退上ヲ志を形を未ハ助合稲荷の森を中楷ヲ為て陣を佐清良ハ夢大打ヨりて是を吟敵ヲ近けまハ人ヲの息を休免疲ヲさセ多勢を三手ニ分内田実の峠を彼峠ヨり一所ヲ打出ハ百家後石塚真吉彼是七手錦波の勢を合セ男進て打て〳〵ヨる日ハ西山ヲ傾ヲ敵ヲ競無りあのを土佐勢叶ヲ〳〵と思ひてや又川方の道口ヲ手ハ小

勢とうて志賀の体一切て盆の橋井坪程を過ぎて相戦へ
る土佐勢後より敵右の手まで寄せ来る多勢なりしかん
とする彼土居勢突すけ仏のひのせいと申くの内のひーらくを元
成寺の方へ引退くを土居勢追くと喰とめへくを
まて土佐勢の味方の討ると彼も不敵者共なりと落りけ
を追掛くて討ると思大将弓象印の旗本へ近く防ぎ元
くてくを安芸伯耆石見山内桑名丹後等元親北
家きを後の加勢なりくて寄手の者とも返し合せて喰
ひとを乗はらわてい佐きーを見る家はを見をとやを
虎口彼者逃をてやうくー二森へ川ゆ申所ゑ土佐の家
の子ゑ伊後十郎と名乗桑名丹後ゑ押通をを組をを
之来備をくる大力の者不屈(モノクスシモ)とも不強十郎を掴て中
ゑ掴九の掴へ抛んらに十郎さく後きひ者者ゑ

も不臆(ヒルマ)逃金ゑかるくりつき桑名とをる蒿市ゑらくる小
輪くくいをり来て泥田の中へ桑名彼取て押込つゑる首
をうき蒿を安芸山内依ゑ近沢を外桑名ゑ良等を十郎を
取殺(ヒルマ)ゑなくゑ人と元てかゑ家を木原郎山本万助土佐
三郎川原藤四郎ゑをいゑ土佐方一騎南ゑの者とも廿騎
計うけ合せ安芸山内弥妃を外の若武者とを四方へを
川とうち掃込伊後を助け押隔つ伊後を七ヶ所痛を負
けゑくゑ四ゑ者捨込者り此所土佐方ゑも侍分十一騎
討死一を外負ゑけまくゑ敵を三羅追掃込今日の
軍ゑ果ゑくり伊後一人を助くん とて義平の侍討きくを
とを桑名丹後を付取そ彼味方へ取留くゑを清良大きに
悦喜ゑりをの我ゑ討取そ数合くを百六と首此ゑを記し
る面の別ゑ及ひて勝関を何ゑ各城へそ帰くる

法花津秋宣多田信綱清良相図之事

多田法花津右人右京良坪の内一の高手在山城法行を延
数一之郭かゝ引国吉宗女を信綱妻取之即姫岳ニ千余
人ゝ首を取之取い来土ゝ尾ゝ之りて和泉ゝ森書江の森
と引ける紀籌をたゝのせゝるゝ右ゝ高手より也多申蕃也ゝ
城の森ゝ二里の間ゝ外財ゝ代ゝ山峯々にも砦ゝ籌を
たゝのせゝり土佐勢いゝゝ四国人を数中にゝとの侍ゝ
森へ引取ゝる夜明ゝ者ゝ各後ゝ者無たり之郭ゝ被官と
也時日の仕ゝへ一せんと打出ゝ者ゝも楯井一ゝに押ゝ
へゝれ引ゝゝ いゝゝ出ゝゝ ゝゝ引ゝゝゝ ゝゝ籌
ゝもゝ代ゝ者ゝ也侍取数久敵対陣をへゝ弥丹ゝ早速
土佐へ引ゝへゝ者ゝ ゝも者ゝゝ ゝゝ伊毎分の敵地ゝ
詰入ゝ上城二攻落一人質也取又西ゝ川迄信綱ゝ図ゝと

ハ土佐領田多代事ゝ者ゝ彼是合ゝ訳ゝ責取ゝゝ也
西国ゝの後信ゝ者ゝ ゝゝ ゝゝ場の軍ハ負られゝ也如
終の勝ハ味方ゝ者能ゝ ゝゝ ゝゝ ゝゝ家臣ゝ
斜ゝ引ゝの走ゝ ゝゝ ゝゝ

多田古屋崎之事

去程ゝ清良人ゝ物語ゝ多田古屋ハ字新文なり彼之
祖古屋ハ人の子おゝなる人ゝ清家ゝ ゝ多浦ゝ
の信綱の父虎綱ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ板羅者ゝ ゝ ゝ方の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
立今心を ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ至次刑部宗林迄何ゝ賢の門へ何ゝ人なり ゝ ゝ ゝ
綱ハ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

信義方を仕て人々の目を驚かせぬる程に成ぬ
り又ゝ早く知られ万夫を行やぶりて世を越
人間ゝを為る〳〵と云は元徳元年十月廿日より一所ゝ
し相撲を取るゝ芝尾御岩崎と云へき所ゝ一陣の者共
皆知〳〵歩を進めると云〳〵信濃我ゝ以て一騎当千
土佐殿を防ぎ奉る事之を聞き押寄せしを防ぎいて
御ゝへ馳参る相撲なり〳〵西園寺殿の後詰せらるゝと定めて
謂ふ甚しく人旗既の志仰仕りて小我ゝを人とは申
敵ゝ寄ゝ法皇四方ゝ之間〳〵寄ゝを之出仕と土佐ゝ
をつかまる足物不仕ゝ之なる一人信濃ゝ変ゝ
ゝ男ゝ之ゝ〳〵ゝ小者ゝ土佐殿ゝ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
ゝ以ゝ時信濃一騎の武士と思西園寺家ゝ〳〵〳〵〳〵
歩〳〵ゝ人〳〵ゝ岩ゝの弓矢取ゝ清良ゝ〳〵ゝ

しと以ゝ旗ゝ方ゝ人ゝ時ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
日〳〵の事なゝ〳〵ゝ取ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
〳〵歩ゝ〳〵ゝ初合戦ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
合ゝ〳〵ゝ勝ゝ〳〵ゝ相ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
味ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
山岩石御川ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
楊井ゝ流ゝ歩ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
退ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ二の丸ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ崩ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
歩ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

修業して行りき時方ハ山鹿の家仕習てきりやと存ぜしし
清良西国為ハ祈之事
因ハ三月ハ深田中塁ハ為体場所一ヶ所ハ西国ハ為ハ為家
流を定て神主代理ハ被ハ為体を為ハ清良ハ為
ハ山鹿家一為ハ為城仕合ハ為ハ彼為人旗所の
後信ハ為ハ不信ハ隆宗ハ又遠心方ハ武士の作法
迄ハ為ハ為ハ為

方なれとも深ク恥ルとて自殺ひ拵ひ者を病者とそ一ツ以て
右留守なるゆへ久枝の息子を引ク越て又ク度へ
奉ル入一ツ之ク度の結ひ引ク奥義陸隆家ハ者も何ク
何も土州より当国を義亡ク逃ク者を目の当
りて不手果ハ之ク者を当国一ツ者とかのり一ツ信良立て
中ク孫ク兵ヘ是ハ武ク士ハ武ク士ハ武ク士

ふさ人ゝ何某ゝ娘おとゝ何りて女とゝいひはいまに童女
うて立類を掘こと生祖の丈を也所讃こきにさとゝうて
して彼家りもゝ家者何りおとゝいふ子を生うて万寿と
ゝきまき深田出義右人質風ゝ人をくき行なるゝ人を立
妙り恵数事方て改易せしゝ元亨二年正月初日土佐ゝ高
訪ゝりきを後一の森弓兵衛を掘り成土佐家信風て為頃城代
也ゝ右を整守りゝる

一隙殿と西園寺殿和睦不調事

元亨二年辛未正月始細中村左平寺し住侍土佐ゝ所を生
ゝ来り一条家ゝ信良和睦の子を立て中家信良則西園
寺殿ゝ以ゝ元何れ者ゝ出度ゝ因ゝなき故和睦不調を
後ゝ山後生者右は京西侍来り物を寄之成寺の西侍合称
して元中りる信良ゝ出て黒沢殿一ゝ疑子細を伸てり

りる右柿也宗我戸元親一条家を向ゝいはるゝ用ゝ家ゝ彼
を平ゝけ人ゝうめる和と成ゝ守しゝ元親命代の表裏何るゝ情
ゝいゝ右一条家を傾きゝ人事を疑を投右
当国ゝ望ゝ中ゝ眼ゝ出ゝ右出今和睦して成ゝる一条
家を敵ひ如勢仕時ゝ戸方ゝ家ゝ武略ゝ大物ゝ
し持当り治ゝ孫ゝ元冥仕能ゝ元親を計策ゝ為ゝ大
将ゝ者ゝ当西ゝ弱ゝ郎士ゝ男逆元親ゝ遊ひ国中ゝ武
士引入可仕ゝ右ゝ家ゝ敵ゝ元親者ゝ後ゝ敵ゝ家ゝ
て戸生ゝ以ゝ家ゝを初ゝ敵ゝ家ゝ出者家を心あゝ人
を立和睦ゝ成ゝ以て一条家ゝ人質風ゝ戸ゝ
ゝ川て此者ゝ強ゝ人ゝ成ゝ理逆ゝ大事仕
遠藤紀ゝ者ゝ成ゝ是は後ゝ乱ゝ以ゝ戸弟ゝ
家ゝ一ゝ以ゝ左佐合弁生ゝ永詮義ゝ内ゝ元親ゝ弟出ゝ

忘れ一条家を傾け人方術をつくして当家に入り伊勢へやらせ
人元親をや退治せんと思ひ果中出来一ヶ安並左京進来
係き者まて伊与へ参入て働当家の男女当主左元親を亡
き物へ知かわ乃ち以同心の事ともを元親を乗て退
治せしめんと一旦仕向し村し居し
の者共嘱(ヲカシ)落一味をセしてまた入いまへ面しの役
並らりを清まりまた元親を便ひうく川を彼ら殺害と果て
口惜ク存候を合こ何ともの法尚家とは面合を以ってと心
底より仕方こそのとも多くこの方へ元親を文者を
あわとこの元親は退治を疑方乃面矢北ヶ市ヶ元家ヶを
殺め個ヶの面しに係わるりと一回し敗を再勝仕候為為
ともなて方之人とこの方時元親れて以り殺すて元来
智謀余りもちまりき男女を家へ出

一亡く事何のもらのしう以を退治は当家を皆さ道心の事て与
を引矢を故まへ出をもかく家臣しまを伊予は家内の
内恩報言不忘忘不儀古を存をなくまく心底の野心を有を
有くと様ちまんしんを記信を出をなくまを合て
方の記信文を事ともを伺へく他へ指出一條系写口一けを
を終を和信を助く退治の沙法ハ出まりかく人質弥出
一きをかく新うらて彼人質まをつのまをしまを
に並て能云合乃者へ亡以人質の事ハいくらり頼入ヶ乃
乃は指引まを面乃と云せ面一条家の侍方系云及所人下
こ土民ヶ和を加を用まを亡者きこの弥見合退治狂為一統
賜者面を送り遠方もなく考れをらし指を入まをハ系
こちらく敵のく根を四り並れらんとまを心底亡ヶ
一かく何れ人質を取へつくを縁まれまり後し一

条家の武士なりしが天正二年正月より
矢も不入〳〵く終に家ゝを押潰し土佐一国悉く之取りしを
ものゝ忘れたるゝけり

清良の逆心偽り事

かくて深田中郷高塚城は後も思しに清良土佐多ゝ山一を
つゝひ何りなれども黒潮敵対ある間ものゝ足もだ
とゝ以前深田中郷を放棄きまし清良上山ゝ山ゝ働入
とゝ〳〵ゝ為ものを色々で只廣狩猟なるものゝ人
をとゝぬ働を又何ものゝとゝ雑色多の者に捕して
ものを殺して後しかもとゝ広庭に之来を正祖して邪一義
をもゝ〳〵語をして敵もものゝ心なれ心を意味ものゝ
清良如も心ものけをものゝ〳〵終に一つの〳〵深し後を
く思いゝ〳〵はく清良をとゝさるへき企者とゝ守へゝるの

久枝弘綱父子南方親面多田山田法花津の等ゝ一列
入意何りを上家良高木之間後有間の人ゝ皆一家ゝ
様ゝ此頃ゝ家後監和板島九曜の城代なれ中〳〵
土佐をとさる〳〵きゝ恐〳〵伊与一国ゝ土佐ものゝ一
も叶ゝ〳〵とゝ思ゝまりゝの清良少も是を事ゝ
に去なゝゝ土佐領〳〵手遣之国ゝなゝゝ是ゝ安きゝ
なれ何時を止〳〵是を黒潮敵〳〵忠義ゝ為ものを放清良
逆心と思ひゝゝ者那を多ゝ人事を何ゝ心あく一
月ゝ様ゝ敬ゝを代〳〵家の法を肖ゝ先祖一の不孝とい
ひ不義とゝ以何条ゝ事ものゝ引ゝ系義を学ゝ忠義を
為〳〵者を軽んをゝを他となれ〳〵亡ゝされ人し
前生の宿業因果ゝ為ゝ思ゝ一事を眼前ゝ反へき国邪を
不死ゝ義の重ゝ所ゝ〳〵ゝ家ゝ生れゝ〳〵家ゝ任

さてさて別して清良の果報はたなきゆへと思ひはるる
角り逆心の意地なき男思ひて思ひて出る義
は夜の二道考の心うはるる〳〵ふ義はして箇条からん
や否義はしらく角と極〳〵天は運命但思〳〵とく敬て去
の事をいとひのかし海まさり事

清良記巻第十四之上目録

一清良行之事
一清良く様り尚る事
一土居家証定し事
一玉木源義入江兵部悪口之事
一玉木を鞠源義と云悪口無之事付因あしき事
一土佐勢堀と攻落る事
一桜井五左衛門被討し事
一堀口辻し田玉木八郎五左衛門同意し事
一五左衛門襲義付冬営し火を焼る事
一武義酒合物仕し事
一志吉新五郎門五口を脇差する事
一七月廿六日之親是猶ちさる事付扇の御〳〵事

一 東山殿法行者百人重山に味を煮る事
一 法行悪ヶ薩合戦し事
一 松茸合戦し事
一 法行欣北し事
一 土岐勢敗軍し事
一 土佐勢因士軍し事
一 園長坊逃亡し事

清良行し事

欲茂家崇秋乱破し孫明王者讃臣閑とハ申し乱逆なや
西園寺殿より此義殿東出氏し為根は毒殺法事ヲ実
とハ切永禄九年に多田信孫元康迄南方和尚心よりの
ふさんハ国心し法義津ハ縁者たりといへを疑ふ宮をら
ろハよりつく山田久枝ものと頻肩童逆して縞は毒月和尚
密出なの但信は事を語り妙覚寺元寿寺永合様とは結
ハ清良へもつくといそれ毒ハ清良ハ多ちやとく玉沙
は承及ハへとも孫の事已古今未免し多き縁なハい
某は自心ヲもかしりハいハ保沙寺の呉臣ハ殺戒の梅多
義世の呉臣ハ使拉の祖多し一と中七ヶ伝奸の讃者君逆
我ハ国家の危日端出とも毒しハ人事歎ろ〳〳ハ歓国より

世〻家変化を伺ひその勢ひ家〻物すさまじかりしかの平治の乱
ふの後と雖ども後醍醐天皇隠岐国に被流給ひ一旦は清良君を天子
の勅命を蒙り八幡宮の内東土の中何者ぞ土地為ふ事を
いかに事為けまじ八幡宮の内しかるべき誰何とも
是迄心なきを思ひ出もなく清を示先祖小土佐国中吉信能弾
正忠と申せしを土佐弾正忠と申人は一を小系
九代孫言時入道宗鑑要逆記之後醍醐の天皇を悩し奉
りそれが天下大乱一小国豊四十余年し皆天子の法
味方仕大敵を防ぎ敵ヶ原儀に及といへども絶
ず敵を防ぎ四国武士始め小寄田仕侍中吉弾
正忠と申を遣ひ敵を悩ませ申し遠国へ毎年近動使多く侍
為に二度預禁仕る事は苟も義の小道所にも我君前商と
しそ先祖の名を穢さんや悔多き中なりと〻家

今年を遠思慮敵八方を引へ紀野心を抜せ当郡を
小屋人多し一旦は城内発とく嘆て中を侍京を是を
て城高忠義の道理を蔵一名武家の神を明らされる此
次第を信京山田久枝を任ト者しかるべし左様ひ是を
まし日々強りなり海良君中を出て云事より稼し思従
ともを云ふさを毒を悪子を里を是なるひるれも土
佐豊後へ守へて敵つ此急を示て寄来るへき事必定なれ
ど伝毛をそやを度人させ敵小集きを やうを急一
為る耕伝をそやくさせる事ふ好の方々家寄を五
候一面一能強ますへしとも物をゆる結しいを紀きれ
とも九月十日まで八月の芸ふきい稲不熟して事ふ
をそを〻代を寄月城へ石い色ませ四ツの四之
は石寄て一弱を他紙を此ふ一ふふとふ不石入

はゝ男信敦ゟ之書を以て当例の儀を偽申候ゟ上
ハ籠城の用意ゟ申と申候ハ方々ゟ之を聞つゝ
ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ
所偶心不安と申たゝ又ハ申ゟ引こんとゝゟ清良成男
信敦へ内ゟ之ゟ良従家の子を申下候ゟ之ゟ之ゟ
日弛之長膳様ゟ之ゟ来の之ゟ之ゟ申ゟ之ゟ
入て申ゟ之ゟ此度ゟ之ゟ之ゟ一騎ゟ之ゟ之ゟ
ゟ之ゟ申ゟ之ゟ九月ゟ之ゟの夜の内ゟ清田中郷へ取ゟ
と急を告ゟ事様の之ゟ信敦ゟ之ゟ
ゟ今申記録ゟ之ゟ申ゟ老中ゟ之ゟ戻ゟ我ゟ申ゟ
西国ゟ之ゟ清良ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ
ゟ申ゟ申ゟ清良ゟ申ゟ伊儀ゟ之ゟ之ゟ延ゟ清

良急ゟ大変ゟ申ゟ前ゟ申ゟ稲数栄園ゟ之ゟ
ゟ取入ゟ之ゟ今ゟ之ゟ例ゟ之ゟ籠ゟ之ゟ新城ゟ之ゟ二ゟ之ゟ分ゟ籠城ゟ
相留ゟ城ゟ留ゟ之ゟ丹宮ゟ之ゟ清良ゟ申ゟ之ゟ頭の大将一の
変ゟ独自ゟ之ゟ勢ゟ之ゟ延ゟ之ゟ一ゟ之ゟ合ゟ之ゟ之ゟ延
掛ゟ之ゟ申ゟ之ゟ唐ゟ之ゟ金ゟ申ゟ伊ゟ之ゟ之ゟ清
良相俗ゟ之ゟ只今ゟ之ゟ親ゟ一ゟ之ゟ家ゟ他ゟ之ゟ
ゟ必ゟ之ゟ親ゟ之ゟ入ゟ之ゟ之ゟ俵ゟ之ゟ之ゟ
ゟ大ゟ之ゟ之ゟ辛ゟ之ゟ申ゟ之ゟ一ゟ之ゟ四ゟ之ゟ之ゟ
ゟ之ゟ一ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ
一ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ
ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ
ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ
ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ之ゟ

以忍藩●不逸而已なれ　一知恩寺やと皆何も出果て
て為たりける里

清良と楠り尚孫事

清良敵の様子を考へ一条家の師を引際に者へ知恩寺之
敵ひとりも手向ひし初て対馬を敵なきふ合戦の方術心
得こと一流を敵大事初戦を仕損一てこれ故の其ひけ
敗先此度も楠を楠敵の様子を見合首尾能く考へ
脇りて元親の侍へ実て出御の首を取て陣ヶ敷を
人といひしに不敵なる事なりしと雖元親も手出なりとも
不来とも云て不可的家の江者伊予名右衛五郎と四
将望を郎宗信の武士三十二人好者長勝八百余騎地言り
弓家の人数約合て武子五百余騎雲霞のごと群を寄来る
西園寺殿対陣まいの不可叶と思ひ一条も出一

て引入らるを一ヶ敵に敵に勝よ条家の中の城元親勝も
二番より大楠小楠実ふ〳〵柵の木を切て白城をさ
るのふ籠城のごとく揃一字の四中野高良高木三郎の少城
〳〵ふ〳〵して百姓一攻るの敵いうい忍ひ出て
五百間へいよせ寄り

土佐軍評定し事

四ヶ〳〵清良郎従を集め敵の様子を見ていそや云るの日
乗を暁あひいつそる〳〵敵軍を〳〵きとも見て永陣を仕
うけむひ城を百柵を四り城をうきうり三四〳〵一五
百騎四方に寄とも〳〵こらふ一〳〵を出て又敵を攻
里四方を〳〵寄を思敵殿を攻破一ふ我〳〵と忍
四方を〳〵寄を思敵殿を攻破一ふ我〳〵と忍
四方を〳〵寄を思敵殿を攻破一ふ我〳〵と忍
て元親の勢を四方の家門本陣を維盛

なを〳〵とうゝ生命をかゝ欲の乃ちを人と云ふ所なへの
まと者ゝ者を良従我ゝもたゝこそ事まて人命をかゝいい
い欲をめて一事も仕へ〳〵生涯の国柄ゝとかゝ者
まゝ〳〵を一場つけゝ〳〵と又飯山の欲の遠江守ゝい心あ
ゝとゝさい清良重て曰元親ハ弱き強ゝを対策を考
ゝて多を例まて為ゝく欲の怪我を後ゝ利ゝを元を
考ゝる者のハ皆足高少道〳〵て元親ゝ矢を取度ゝさを
し事ハ長曾我部ゝ色辺の武士ゝ乃防ハ二ハ義〳〵元親
家さを三度ゝ〳〵を見ゝ多ゝ少ゝ京信長風ハ秋村ハ
百金強へハ武家ハ大ゝ人三ゝ多ゝ〳〵ハ思ハ信ゝ〳〵
大ゝ米ゝ多ゝ用ハ家ゝ多ゝ白沙弟記彩大ゝ〳〵ハ格ゝ者ゝて
欲の者ゝ〳〵神を見ゝ〳〵と評〳〵合ゝ論ゝ知ゝ者ゝ〳〵ま
里ゝ河原出相の者〳〵て者ゝ出ゝる欲ゝを見ゝて神ゝ〳〵と

中野藏の庵ゝ和白ゝ乃ゝ河ゝを隔ゝ矢軍ハ里ゝ〳〵至ゝ家
家ゝ元親ゝ者ゝ〳〵ハ中ゝ欲ハ者ゝ〳〵ハ少ゝ者ゝ武ハ大ゝ者ゝを
つゝ鎧ゝ者ゝハ後ゝ者ゝ変ゝ不戦〳〵て引ハ〳〵ハ〳〵ゝ日ハ軍
ハゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ河ゝ〳〵ゝ小ゝ者ゝを者ゝて戦ハ〳〵ゝ者〳〵
眠ゝを覚ゝ者ゝと働ゝく〳〵ゝ者ゝ者ゝ者

例のごとく早川をぬけ、の傳業国深
殿も山縣井を追ふて進ずる所山へ登り山伏を案内者
として進しを後業名丹後殿父を橋井の手へ討かくしを仰付
しと云なれハ土佐ハ之来經達なる家を以山家之成ま
く之新方於く進する言根も何を思ハ少も何のつを泥と何
へ京入一文字を振。義人橋井ハ引退紀く新中米川越ル
ハ家へ元をう〳〵を痛く多ハ何を山ハ新一十四りも
たまりを行をハ引の一を土佐勢法へ山く川中を進橋
早首ナセ討取をつと思ハの陣解を拔ハすす清良城中を
ク見ハ一新を合ハ之ハ宮を思ハ〳〵まを〳〵とをの女
たるも古具を手を東面の庵ハ引ハ後陣を要ハをく
土佐勢ハ西宮藤四を拔く一方ハ遠ハ土佐方川岸ハ多へ
ら鉄拔ハ見ハ城ハ川を迫り新百騎をの是

混しと手入を海し此系土佐の之智松浦左右郎四九郎之
ハ四新軍し助土佐之郎山本虎し助ハと云一人当ハの
右岸川岸の方ハ上り口せをを新へ行むハ又熊本の是
程とて是くまて系ハをくまを彼是六七十人を出数ハ中よ
里手ハ〳〵をハ〳〵と土新を過へ川を渡へいがらんと
ハの所を手の者ハを実蔵一掃ハ入ハ〳〵ハ名ハ
新之地騎討取ハる是を見ハ新業海ハ一ハ中ハを新へ
稼して川を備ハ和へ右方ハ新を清良方面を清良ハ四所多代
見海一指ハとし〳〵江村業名ハ陣へ打ハけハましハい
大勢ひハ〳〵る中ハまを一ハも何ハ矢をのり〳〵新
是ハ大ハ右ハ手二所半退ハ陣ハ中ハけをひき
系を後是程ハ右ハ〳〵ハまを出きハ新右平
場陣手ハ数ハ中ハ清ハけを拔ハて中ハを出ハ

射し入れ遠巻もるく者ども敵家ともたがいに後陣をさ
しく引退く討負を数八十二人内侍分れ者五十一牛の刻
ま勝軍執り四方の体を伝く注進しきる

玉木源義入江会部要口之事

西の方も初度ま矢ともかゝる射かけ後い敵味方共の
きり相を見物しつゝ見ものゝ海面ま敵の陣ま
り武者一騎うちん乃鎧ま黒白の五枚甲を着黒毛の九
く進ま来く陣所ま向けゆ大音声ま敵味方ちいく
矢番して張り意見ハ思時右の方面ま中ま
は高ま四しゆ及いる〳〵くは方なる事ま玉木源義敵味方
俄ま第ま見物をうちとるとうちとる陣中ま高ま
和歌ま意しまを敵ま敵ま〳〵はは玉木殿ま
うみ中ま方ま陣ま敵ま方ま面

方望遠しても一騎見の者ま之の方ま然ま者ま
そはそのまを思案ま源義者いうまも勝ま男ま
方敵ま云筆をうけうまをかも粗略ま能ま承はもの
うふとをうけ出ま敵味方大時見物やとを守りま玉
木ハ紺糸乃鎧縅をあがきまるに五枚甲ま前立一た
ま猪首ま着ま動尺ハまの右刀ま横ま黄河
系ま成ま波無地の鞍置ま高ま向けま赤敵陣さ
して千騎ハ長崎衆備ま高ま意ま高ま意ま
玉木の色ま見ま引う〳〵味方の中へ無ま入ま
いうふとまま高ま者ま清前のま色ま家ま度ハ麻毛ま成ま
千騎ま〳〵出ま高ま源義家ま色ま者ハ者時ま花〳〵
ばしきまを玉木殿ま〳〵とまま行くうまきハ者ハ本乃ま
一騎うけて進入ま源義も相ま高ま者ハ者ハ祐の祐

ゝ遠ゝる事ゝと云ゝ人ゝゝゝと味方の陣へ引ゝゝき
人とす其時七郎方の知所入ゝ以ゝ敵大勢ゝ有ゝゝゝ少ゝ引ゝ
ゝ者の内ゝ綜の源義ゝゝゝ変ゝ七郎ゝ七郎ゝ引ゝ
給仕合ゝ内ゝ馬ゝゝ面ゝゝゝ七郎ゝ
是ゝ以ゝゝゝ入ゝゝ方ゝ天道ゝ叶ゝ有ゝゝ
有一ゝゝ清長ゝ人ゝ申ゝゝ州へ参ゝゝ方ゝゝ
誠ゝ清ゝ新ゝ内ゝ笑ゝゝ彼ゝ参ゝゝ薄衣ゝて慄戦(フルヒワナキ)
しゝゝゝ内ゝゝゝゝゝ織ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ移ゝ庵ゝゝゝゝゝ内ゝ
ゝ後ゝゝ人ゝ内ゝゝゝゝゝゝゝ
一ゝゝゝ返答ゝゝ佛清長一ゝ人ゝゝゝゝ
是ゝ清ゝゝ習時ゝ変ゝゝゝゝ武士ゝゝ古今ゝゝゝ多ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ紙ゝゝ紙ゝゝ武ゝゝ釋聽ゝ

ゝ御ゝ知ゝ紙ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ来天道ゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝ知ゝゝゝゝ五ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大江口に為出立しまして四国中国之人の為ふさる事ハ
とて云々敵入江口ハ大江口の和泉まで之義事なり此を伝
極のそ人ハ海まで御為と云
動ふ紀伊ハ海と云源義経
御ふ以ゆつよ頼源義と云
為弁越後守を討為ゆへ以事ハ家ハ
由也人為者ハ為ぬ一と云々入江警る事云出
ハ源為ハ云ふ為ハ通云事ふ為ハ如川ハ降ハ口
のきいたる為ハ為ハ知ハ物ふいを世を押ふ世ふ
ときや者を為ハ知ハ為ハ為ハ為ハ為ハ
為延地を為ハ為を為川ハ為ハ味方ハ為ハ為ハ為ハ
敵ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ
延ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ

合セ入江ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為

人孫義平小弓間中野源四の外主家諸方此伯形集
をあを士民ゆを伯物頼ゆきを鷲国の武士ゆ四く立渡り
て四い辻しを始め大廣寺孫底遠間も多く並居る寺の業
ハ廣縁ゆ形墨き機義芝丸ゆ立ゆ多の業
ハをゆの雑業代指りをる役米甲一ゆ四ゆ主本ゆ
稽ゆ足さをりをきハ廊を勅立ゆ入り稽を立後いして
きをり源義ハ少しも苦しゆらんをハ廊ゆをあく
ゆくゆきをゆ礼義ゆしくさゆ四ゆ坂四ゆをの代ら
四ゆを強云出ゆをゆくをゆ主本源義ハ一家と云をの
上大到の武士ゆをを四国中国ゆをゆ中国ゆをゆ
山中廉し四四ゆをゆハ玉水源義と他家ゆを談豊者ゆ
強んに清良強き大将四一ゆ代強ゆをゆを入ゆく松
浦ハ良を勅ゆ足ゆく玉水を潜ゆをゆ他ゆ銀重上ゆ

ゆる勅の大場ゆをゆ四ゆ系船を子へゆきをゆをゆ心
ゆきいゆ玉水ハゆゆをハ廊ゆ四きゆゆと見一ゆゆと様し
思口ゆと少四をきゆをゆ云ゆ足やをゆハ玉水をや急
て鞠の源義といへ足踏水殿ゆを四ゆハ廊を勅風
少を強ゆ迷惑ゆゆ四ゆをゆ玉水ゆ玉ゆ此事をきゆんと
ゆゆ四ゆ四ゆ四ゆハ玉水殿四ゆ源四ゆを代ゆ
取ゆをゆゆゆ子細をゆきんゆゆ四ゆ元来東
浪人ゆ切腹仕ゆを不足稽ゆ有ゆ果ゆハさゆ多ゆこへ
ゆを方代ゆを浪人の口雑童四ハ第の強ゆゆを仏苦
勅ゆハ人四ゆをハゆ稽ゆを仕ハゆきを云者
きハ玉水玉実ゆ者四ゆ四ゆ動ゆ勅ゆ等験ゆ家ゆより四
ゆを玉ゆきゆ四ゆハ玉ゆ一節ゆを事ハゆを神美ゆ又ゆ
四ゆ四ゆゆ四ゆ他を恨ゆ又

あるべき伯耆守殿のとき人数を不相人をもかるべし面又武略有数多のいのちかりしをうたくまるへき数の深き義さるゝいかに智ゆへ我秘録の源義と云て此事幕末と之如有之事なれ一人も死てい清良の換へ〻京師の云事を必学ゆへ〻のあかの山事を此清良人も有のゝ〻るとへ〻しか思る事つゝしの如是激事也うるとく鞠とる本殿とるいへ事を疎たきい強〻とし人も儀るい双ものうち一人い尝事なのんとそ也ものとさ事なとも如意色〻〻て秘うつく実ひとり八府多御面〻〻こ面〻〻と口述て数息〻きゝ人ものあ事てさゝ人とよ何事とる様系をなら紀ものていひとゝもい一面〻〻つ、いあるものくさゝとる君子

ハを和を正代とて主根元を此体〻く是い源義ノ名の底
ゝも成へきこの又なるまゝ紀ものかと二つ分て底なか
るまゝさるなるいかれの程思ものかとも寸入さる
ゝうゝそゝとを穿鑿とをいかるまをいとるもあれ
云ゝ老ハ松浦も思常歟ものうゝすゝ〻と申ものり事後
は説牧云ふ正〻て強面二度浩也〻たるとく此清〻是
関敬なとまてハ鞠の信るうとゝ又後初の参会うも云出〻
行〻子を共ハ多につゝりまゝ木源義ハ部名ノ階よ和て鞠の
風校かなとうゝひ〻と此ハ木ハ人の無くなへき侍なら
和と備うる武者まゝ無度説伯ま翻る是〻への者るまを
如てのるゝ想〻く出名の家中をりと出もり是
関敬は亜京とるいハされ不屈のるゝ如何ま事ハ浩事ゝく近
已海〻て近而の紀を代又者るとを百姓和迄をゝ如ハ

夕ゆへ一よかゝ伝云をはきを迄様ゝと云ひ云ゝ様を
ゝ〜きれハ〜ハ良左衛門悪ゝ一枚を袖迄ゆ上ゆ左
衛門ゆを指そる左衛門是を見ゝ中し云様回所し事之左云
ゝ家ゆを座意ゆ持ゝあゝ伝の若不意の事やあゝ人
さあれハ惜きゆゝとて右京亮人六府左衛門ゆ伝ゝて清良
の耳ゆを入ゆる其目あゆ云

一日 御於御城張ゝ年玉不伝蔵ゆ其伝ゝを出さてゝ列時
小其礼義ゆ調一巳ゆ海ゆ以後伝方ゆて玉不ハ松浦ゆ
文遣ゆ初ゆて鞠の伝蔵ゆ云ゆ迄ゆ少ゝ日度人彼
ハ御当家ゆゝ一弱当ゆの伝其儀迄ゆゝハ八府左衛ゆ
ゆる皆り親味ゆ共ゆ迄ゆ人ゆ為ゆ南家の柱石ゆ為ゆ
素服ゆを仕ゆて玉不敬要ゆを為ゆ一年ゆを為ゆゝハ伝踏ゆ
ゆるゆゝ以ゆゝと以理意ゆを新蔵ゆ為ゆ伝の伝世迄

左様ゆと一紙ゆ仰ゆ上ゆ変ゆ体

三月五日　　松浦八郎左衛門

五月左衛門殿

ゝゝ中上ゆる清良ハ御一ゝゆ御面ゆ迄玉不ゆ御ハ
板世伝ゆゝと以ゆ迄ハ伝蔵ゆ松浦ゆ云一ゝ迄ゆゝ伝
ゆゆ以ゆゝハ横目ゆ年迄ゆゝ一人ゆ為ゆハ出ゆ迄此
ゆゆゆ迄様ゆ云ゆゆゆゆ一人ゆ為ゆハ出ゆ迄此
ゆゆ後以ゆ迄ゆ皆呼集ゆ一ゆゆ為ゆ為ゆゆ吟味ゆ
名ゆ迄ゆ仕ゆゆゆ左衛門殿人ゆ云ゆゆ為ゆ村里ゆ
ゆゆ迄ゆゆゆゆゆ心ゆゆゆゆゆゆ清良自ゆ為ゆ出ゆ
ゆゆゆゆ窪ゆゆゆゆ眼ゆハ角ゆゆ出ゆ常ゆゆ耳ゆ底ゆ
教授ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

山清良は勇名いはるしあり毎清良なるを主場とし討
死するの宰人にして又何方なく誰人を頼てなく扶持をも
結ぶ人なきを時ふ食儀共をいたきをいたくいはるを百姓清良
の名を恥て家事なるべく穿鑿なるものいたとへ勇なりと
も血筆代勇と毎又時毎人の若共ハ多勢なるべく戦場中とも
いめ所無引しにて其まに二箇とさのらぬ者をこそれれ
なし数の味方を助る中にも為本合戦まを不なるハ西国
多数に居ハ十二一もあるを多数なるを人眼為なるを
本かなるべくたとへ人ハ鞠と云て蹴ら者とうとんハ底
なるを無なるを者とうれとも場毎の手柄ハ新成なるを
相おもるべきハ武士代無引ハ者なるを時役弱共又鞠
を云出さん二度三度とハ場共さるとも又七度なるも
度ハ仇を含むべしたとへ左なるを松浦なる者なるを来て

よいの様の心えなかる一一かく人の惜き中にもせ食
義のハいやなるきハ実人をふとハ不惜ハ他ハ
なて云出代とハ代ハ代なるを紙ハ誰なるとも稀なるを
り力脇指し強き侍なるを者多者きとかく事なハ
ハなるなん又毎木を松浦も後悪き共なるなるハ侍衆中もさ
しく思むとさなる代共を臆病共なるく武士代屋場数を越
てなの如き我家中なり云出きの事疑なるハ始ハ城内なる
人なるなるなるなるきハなりなん場なハ郎衆なる源
廻方へ行なを偽共を云ハさて隠密なるべくを迷代さ
さなるなうハハなる侍衆中なる嘩口なるなるなるなるり
絶きハ味方打と云なの二勿論同士諍なるハ者なる
なるハ知人を敵なる報きなて孫数なるなるなるハ代人代能く横
目の共なるをかくなるべくなるなるハ代なるなるなる

仕事を無一一毎に八郎兵衛に逆心を告げ忠臣と為さ
るを彼を松浦家の子にて穿鑿つゝするものゝと内
々佐々木橋井佐能かと〳〵詮り吟味し一人見えるを首
数の場数をしゝ付きを首尾をあらすする世をゝゝ首数
以ふ事をゝ当人の名字如何よう吟味をゝ此内佐木源蔵
首数八十六の内能々三十三討取松浦八合赤首数五十一
〻内紙首十七討取と後々れいそこ為清良心地よけな
打咲て為橋井吟味へ出木いそ手廿五家八郎兵衛八廿
二家〻うき仕如〻気なるを一〻も清良なる多仕為為い君賞
如場と〻ふるを不成我髪〻筋を見けてもとゝゝ
きとも心斗まゝ〻ふ〻〻ぬ也〻ていつきも知ゝ是を逆
居ゝる京迄続きて場数あきもたゝ〻は清良の方のも八
万四千をゝ〻ゝ〻ゝ〻

兵を拔いて退出し

土佐勝城と攻落す事

九月十二日丑刻一番鶏鳴時分西国寄手数は一番
に高石が皆土佐大森へ引取る其より高野の衆も
隆家一人高木城を見うけ四方きれい
殺物こそ一人なり毎夜方の土佐殿小城と思四方いつ
き中村右京の手地を伐れて川より小へ越さりそ
見ハ仏家を渡すり方寄手を四方と和泉守を味方
と川を隔て敵の寄る水辺一ツ所家ハ物うち物
こ迯けるを時分川を渡る事不叶ゆ一人とも
一一体及ハ為ル地形を切て一手ハ心得ル習なるとうす
様有ル所ハ敵対の事

かくて九月十四日ハ西国勢高野新衆如所人数の寄
ることあるを先ちり集ル兵庫十人の内別所を四百余人
合セ九ヶ所に分て又三ヶ所の陣と後の日一二日
ハ恐むを又左衛門ハ城内の口人を百五十人を迫め三
所より可寄へと相図を定毋の母屋の秘法を云史を
一人宛面しるれ則を史を市ヶ瀬と云一ツと
右衛を極ル寄知ル所面数ル強く河水を埋れハ敵見
ハ寄来ル寄ハ行ル一ツ所の伊勢ハ郷侍
面城後ろ手ハ近辺の民屋ハ牛ヶ谷の内屋
ル取入難兵を田畑数本信ル名代側懐義右ハ
押掛ケ寄ハ一ツ所ハ城へ迯ハ道を城遠物
明日ハ方を編の藝居ル所ハ川ハ弱ル一ツ所ハ
を数ル所ハ心あ行ル所ハ難人ハ角をけると
ハ城を行ル所ハ東面の白地ル見物ハ合人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

以ての外堅固に世業をなし、四書の面白きを学び、万事
謹厳に務める心を生ずるようとの歌より川の流れの絶えざ
るもせるゆうとの第五句にて、その切れ目の頭に
無為の天地を加ふる事神明に祈り、教事なりと考の
と、いと盛りこそ、ようかりて老神の物既にて、
嘆といへども時なく、心の安き別荘に立ち出で
逍遥遊ぶうちも、実の道を云ひ、学問を煙草の徹し
なる者を用ゆる故、大こうの人間さあるうちにて
万信の大欲を引捨、物恨の所なきを、歌に詠み、
て無為の道を清良の武功者ばかりにやさん
わ良ばいかばかりか大なる靡けば業をかく歌を地よの
る事古今とも和漢の比なり及ぶ云々

五右衛門を褒美ず冬営の次を偽る

清良五右衛門を呼て其方を招とに紀さる事なき世柱付
の時そこ〳〵のそ屋敷なく神妙なりとし乗みえの歌
状を出さしめる五右衛門計を伝き諸を歌を叶ひ
難なく分ける清良なるの夜討なくれを捕ともなる者
の侍士何者も大到此方を出別なる人いてなりて士
卒をつのるよ悪皆抑を之を和を元自由ゆゆ〳〵為
男を不遣大将の不分探聴すたるゆゆ〳〵以品と
の猟乗ると仕ると脱地深海大数小数入組入る遠方と
ると和名とを一ハ既古時ハ深しと合戦を世為象の
は号矢なりと之へ之り一人としてなる者
ると又徒きて習打者は時なり知ハ数の氏
の合ると〳〵ると之毋後ハ夜要多者の毎公歌を焼事以
人男の見ぶとも見へうと之ハ山を之に拾いて物

の歌は五十三ヶ条に関係するハ必定其箱一ツの中に歌を見んと存ぜ指南て尺之条目を見人と其意ハ書ヶ条も慥に見んと事の約合事命の掟心もみな玄敢火ヲて以て歌を打る音目を其一出ると也教一に様ヶ〳〵ハ難合ヶ条と云歌ハ自分の生る教一ヶ条も

うるヲて俗は南家の歌付物他家てはハ〳〵誠とハ為

ヲ為ヲ〳〵〳〵小田舎の家の俳主知ら中たんハ歌付の

主稲梅の事如何歌付るヲ学た為ヲ其ハ〳〵ハ

なハ〳〵ヶ〳〵ヶ条ヲ也ヶ〳〵家火ヲとして八流と称為あて

此ハ其ヲ和歌〳〵不淺様の掟容仕為ヲ法の中一ヶて

〳〵ハんとヲ中ヲ武為ヲ俳ヲ為ヲ為ヲ〳〵ハ中ヲ〳〵歌付ヲ

為ヲ火ヲ俗ヲ為ヲ事ハ為し事為世ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ

ヲ中ハ武為ヲ火ヲ二代ハ為ヲ〳〵ヲ為ヲ人ヲ為ヲ〳〵ヲ

毋彼も是〳〵ては来ヲも火ヲ少移りてハ〳〵を為代の

火を為てヲ為ヲ俗ヲ交ハて一ヶヲ中ハ為ハ為を為ヲ為ヲ

主以ハ為ハ奇妙ヲ為事ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ火仕ヲ為ヲ如ヲ為ヲ

ハ歌付ヲ一の主意ヲ主ヲ為ヲ如ヲ〳〵ヲ為ヲ

武為ヲ為ヲ俗ヲ

武為ヲ五ヲ為ハヲ為ヲ〳〵ヲ為ヲ為ヲ為

聖ますて為廣の儲利を失事有紀伊は大物ゝ如和ゝら是係
幸ゝ機を逸タを不拒採ゝこ推を仏約々と氏大將此年の
氏を伊坂をとるなのゝとし一度為六年ゝ冬ゝ押と
ゝ東ゝ四十年為恒ゝ切ゝ坂をゝるゝ進ゝ事的ゝ大
將惜ゝ錯を生て相ゝゝ約の為ゝ是別て其為家は先祖
ゝの法ゝと毎度ゝ武器ゝ用ゝ人ゝ分ゝ不足年ゝ
及ゝ心ゝゝ通ゝ猶ゝ素欲を傷ゝて前の利失隠ゝ是ゝ
やゝいゝと是ゝ佐事能約者を当にゝ一ゝとゝ

志摩新左衛門ゝ如口を脱事

和方五ゝ為ゝ欲貪慾を発ゝ川端ゝ出ゝ
うゝと四の加ゝ不知夢四の川船ゝ行ゝ是ゝ
しゝゝ、きゝとゝを徳ゝ能個ゝ七清良味ゝ足
諸ゝ世欲川を越ては十ゝゝ利を失ゝ一ゝ好ゝ川

を当新ゝ引事ゝ付ゝ佐幸ゝ行ゝ十死一生ゝ事を必
定味方討負ゝと思ゝ不ゝ河を越ゝ紀ゝ出て川端
を防ゝ一ゝ為ゝ知ゝ是ゝ志摩新左衛門ゝ
ゝ欲四生昭ゝ事ゝ為ゝ一ゝ氏と云ゝ的為人新
左衛門為ゝ為ゝ心ゝ八ゝ人と思ゝ為ゝ
個ゝ一ゝゝと四ゝ新左衛門云ゝ為ゝ
佐方利ゝて氏ゝ少味ゝ号ゝゝ麦ゝ一ゝ作ゝ
又ゝ押伏ゝ勢ゝ赤ゝ傷ゝ風ゝ侵ゝ木ゝ茅ゝ
洲ゝ一ゝ為ゝ新ゝ夜ゝ付ゝ為ゝ為ゝ氏ゝ月
とゝゝ為ゝ勢ゝ味ゝ小ゝ欲ゝ大ゝ為ゝ
ゝ為ゝ一ゝ生ゝ紀ゝ水ゝ深ゝ為ゝ押ゝ為ゝ戦ゝ人ゝ
不ゝ為ゝ為ゝ為ゝゝ為ゝゝ為ゝゝ為ゝ
ゝ仕ゝ為ゝ為ゝ為ゝゝ為ゝ為ゝ為ゝ

又欲川の淺深を見て稍々味方あり向ふ岸の方を渡り渉るの心
は勿論なれ共深さと味方い難不を知る欲を不渡とする
評なれ共是は清熊の国〻に於ては
きき〻ハ名此系右と回を水と渡り附て川すりも後て帰京
もあのうち〻一向に渡へ川幅を点不也動向と欲う欲
の事路川端より先て彼方は方をいげ〻なう渡すへき
と評議一致する為へ味方の勢彼川の難不第一の不味方ハ
利方地より方向を渡ふハ妻を防うんとて是をつけて家来
のうち〻欲を見て右に右へ路を出して為うハ是則渡
り渡家へ〻として呼まを見揃て通ふとき右勢沢を見
〻妻をせんとて為る意色家の小河原うちも高〻に
立並て為うち〻る所へ欲は多分は内の先陣して高名さ
仕んとて為ひ為方とも先は進と敵を知て為る為家渡し

と系の川へ渡と入方を為ち為一百騎を組て渡一を
為る川中にて渡橋を折て逆茂木を押流て而へ行うち浮
ぬ沈ぬ漂流きるを渡て寅流を渡る逆茂木一を川流
う〻とよの〻うみに為る川岸を行のうんうち
為も折茂を河〻渡渡る百物をして御自用為
さる為を味方なハ諸授働けうち方を刀をして百人諸勝
命を勝鞭をけて薙働一岸の為を刀を取て押へて首を為打
伏ていハ切敷に為る討為て是を秘蔵為りと為く為
ちうの〻川為いよ是物し他ようをうとをきり味方ハ
是を討取川岸を立ち〻一向に出て笑ひ為ひし
為る一の森〻義家しを西国方為人伝を言家九郎方
七郎二首人狂言を打〻ふ（キトウ作ナリ）つうを是を欲体の方へ川越を
文文を是を射〻る

古住函右ハ三分人ばかり程ある潮の行き
りなるあのまゝ水ハ那
三かきりて蔵家河内ゆきまゝ右ケ一条の武
士ハ流れき
古住方ちらゝ〳〵
古住武者のこけハ一おいうるまいハ水神と
て欲ハ見るらん
濃ると三間の川を深うして 只怪物ハ切ハな
きれい
かくいいへうる古坊方〳〵て知へて体を取りなんと古坊方
也城へて引入りる
元親留足潜を出る事扇的ニ事
かくて右あるよ出る元親家老江村方ハ長ケ七

尺ばかり此大の男計人様ハ成川へ打入東潜ハ
欲ハ色ハ本領地ハ本能助分さ〳〵外をもらうものあ色
ハ見ると人ともる川中うて手伝きんきハ落ぬ沉こ
ぬあるきりて江村見を見て理物見〳〵見潜をしてつゝ
江て居ちや者ちと知しきれを菜田ちらさる川ハ色
ハ居さん とるものもふしを三欲川ひうひる矢尾を物
一箇口をるゝ伯ちるゝ老人ハ色むを右ちてあ
うちり其後蔵人ハ角ハ欲うも海りハしを色ハ
来ちをあるうめて体を強り川水蔵ちうて信五人事也色
面ニ口部吉住川ちて欲ちうう扇の的ニ三〳〵し色取ちて
又味方分立〳〵一村さもしく眠さ国ちん とて扇をはさこ
川岸ちたて〳〵欲の方をそ見ちる見を口江村方〳〵立
潜りへかはゝ三十何町りあのきけさちも欲て出ケも

知りたるに秋月藩主松平右京亮の中小姓にて諸平の中右京亮に対面して江村川端へ出て鉄砲を放ちて二放一打たる時後へ立ち一あり打ち則ち右方より水徐の逆者あるを見て欲体へ解剖させ中見れ尝て打ち取りしかい江村大弦を呼び寄くして見へたる打つるとて乳を差して使の者を招きとらせて〳〵〳〵後見を除り既に出でんとひ出の庫へ游越てそうつる高野山一者を何ぞ出でさらも所也玉宮寺所八九反隔たり見て欲本藩なる術一業方より呂第いまり引たるる

東山道法印有百人金山の樂を書面の

菅家の出陳五十日ほも後りしかとも堀を不思意者もうしかりの日にも後や立て欲体へ体面 三キ 各批判しない

清良記ならい時写とれ十度や世なを可去出るのるかの以後も首尾合をはくるる人数を川端に出して掛ら

さるいめの撰大欲と見てちとは出たるるは清

良 いるもあるしと云者あまいは又清るは理りるる八清良近年樵氏西園寺殿るもあ面るとと云今うる所大欲を引清出あ所ふるて いるは出立て来るる小方者の!?

に住方はるりの師だて和の〳〵みるま先狩の扱討るとも兼くは行くる者少るりて湖月記考 お味方為年を

こるるるるるの清立たるの清立所同家の伝いは各とるる清

第一松よ塩るけるる風情又書数き形勝へ欲るとり岡

ウ立て一人も一乃木左とお合たる者はるるるるるるる

いくハ清良斗麦蔵さ代閣先狩る堀しを知黒原殿

麦箱一るるへ山れるい扱ひれの清条七さ七人貫を知る

毒後西國方殿様を御ゝ[illegible]ヶ時方ゝ[illegible]一条家の御先ゝ
ゝせかゝて四國中国ゝ服ゝゝ時方ゝ[illegible]事出ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝは先有間城豊後屋敷ゝて[illegible]家ゝ
の中出ゝ城ゝ方余藩ゝて九月十八日ゝ有馬ゝ城
へゝ押寄ゝゝ城を能代能無父子ゝゝゝゝゝ欲ゝ城
係ゝて引寄ゝゝゝ屋ゝゝ[illegible]ゝ城ゝ西
ゝゝゝ[illegible]ゝゝ事ゝゝ屋ゝ[illegible]ゝ五百余藩
屋ゝ[illegible]ゝ城ゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ利
ゝ家ゝ近寄ゝ鉄砲ゝ[illegible]ゝ岩屋の城を
城肥前ゝ能親欲の後ゝ日ゝゝゝゝゝ押強ゝ
金山ゝゝ相違ゝゝゝゝゝゝゝ城中ゝ
来信家ゝ四ゝ日ゝ屋ゝ四ゝゝゝゝ
と云ゝ列の方を出ゝ[illegible]ゝ

ゝ藩引ゝ城を堅固ゝ[illegible]

法好異ヶ崎合戦ゝ事

明ゝ十九日土佐勢又肥前ゝ八王金藩ゝ少藩法好ゝ大
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さて拂へ者共とり急ぎ自身陣取りて突てかゝる
法行も業なる者しるを痛く迫詰る即時に敗北しうた
る親長信綱遠望なりしに皆四方河の乃なる程
なる五十余丈五百八幡東小路を崖もの崖へ迫之間の刻より脇
間を絶切り法のもを念なる東方なるゝ人其狀ハ崖
なる陣取時なりしなるはなりしなるは又鬼ヶ崖へもゆるゝ

松葉合戦之事

明日代寄なる大手へ寄いらるは法りハ敵ゝなる五員なるか搦手
の寄なる紀信堅ハ少毛疑擬なる伊賀の三郎ハ陣取
おうゝしなるなりなるなる河を渡なる城の町を繞陣へ見へ
なれハ更漸夜なるゝ山田然なる久投去経なる郎なる是を又
しなるは敵なる元川なるゝ小く河へはなるゝはなるゝ
なる法なるなるゝなる河なるなるなるな

うち由陣屋より戦い屋一人ゐる病ましかも御著と及ぶ
も面倒出られて今日の事是まで丸方勝負をさき
て法力入り川を越て南の山に陣を敷て佐野山田に伊賀
の山へ引取佐藤山より法幸の息を休めり

法力敗北し事

明ましかば二方乃時多田南方より強力の勢五十余騎くい
こり寄る法力陣屋へ押寄一番なるよりとりて多勢的ら
習近寄一小為話あまり対面をなし三人の者まで迎入り
佐野山田是を見てそなの事よりかく新よ利
を付るに仍の戦難成付と仕損して田しく和睦を求ん
ふりかと之ひ是も富ら へ加りかつまて い掃るう東小
路も勢弱りすこ〳〵とりる時海島突く
法力ちんはたらふのたそこるへいりこ

て はよもこまも きて
と日ゐ方ゐ勝りこうり去世ゐ方ゐ和へ方立
し時は勇ゐ進ゐて法力
一てうれたくこを三ゐるを紀あ命一東小路を
うロしきすする
とふこーいちあは三ゐは在西園方殿ゐ宇和ゐのもかく
後ゐいさこ明ゐ〳〵ゐ引口河〳〵まゐ京を捨ゐ
ちゐりのいておうゐうゐ三ゐといてゐいのゐもくと
も一てうの要ゐ明ゐへ三やうもゐ主陣きこうゐ紀
事ゐりとし何ゐのちゐうゐんうへしゐ
一てうれたくこの三ゐる明ゐりゐものゐまゐ
さうゐ蛛の多つ
一てうの要を三ゐ明ゐまゐその家つて

もしふる
四人の奇ものいふやうなる
ゝ腹いゝ成事なく
土佐勢夜明く事
かくて三月廿六日以後は土佐
勢も進まず手を尽し方術を尽し
目沢芝の縄よゝ土佐勢出つゝ
かゝりしゝ夫が北の堀の藁上に居る者とて
堀ゝゝ陸てゝ川端へ人数を出し土佐勢ゝれはさつ
とゝ入又引て義出欲ゝ不安合悩し只四ゝ
の者を毎夜欲堀へ入て
ゝい土佐ゝ謀は土佐勢を堀の沼へ引入て討へきと
たくむと見へ
ゝ

少其後は土佐ゝ五六十百余人数を打ゝ出し
も始りゝ引て見ゝ出欲敵て仕入ゝ川を泛て
者ゝ土佐ゝ出ゝも毎晩
討を無ゝ許ゝ欲ゝ
世ゝの陸ゝ
ゝ色を新ゝて心急りゝ
人をまはし南ゝ新堀
ゝ押寄る新堀
一人も不遁取新て討と云ふ
北の四郎を取ゝ
て討ゝとゝ
ゝ土佐勢の
ゝ出陣
ゝ

ゝ北へ進ゝ〳〵皆し株本へ流れ〳〵あまたゝ和さし
へと云ふ古れ物語を寸已ゝ何事をゝ中をそなえ和四郎
りして愛ゝて一条殿を江おゝ西東えゝ所ゝふゝと押
常〳〵考へれを梅いゝゝゝて破れ〳〵ゝとして関東(アヅマ)調事
ゝ〳〵ゝ和石京へ折入ゝけ京殿ゝ内ゝえ殿の結婚ゝまた
る事を既ゝ歌まゝ〳〵えの和兄弟をゝ国おゝて西おゝ長久禮の
武士ゝゝ折ゝゝゝゝるそゝかれ〳〵皆ゝて一人も参さゝと
ゝ西使ゝて親をゝ〳〵云異〳〵ゝれゝ誠〳〵ゝえゝ
もゝゝゝ大ゝゝゝ折を清〳〵血ゝる変をゝのそらのつゝ変
万切家ゝ遠流押ゝけ折四ゝゝゝ株のゝを義ゝゝゝ四
角ハ方へ変ゝゝ角能やいを見合を一ゝゝ成さ紀は
河ゝ北へ進ゝゝれ方を立殿人ゝ〳〵ゝゝれ殿皇を風(ホ)
ゝて内海破きのゝ参心流(元)えゝの体所へも参ゝゝ引取ゝゝ

く牧縁〳〵ゝ和へゝる所へゝゝれ殿祇と押寄きハ江右方ハ東
一条家ハ西ゝ和ゝゝ事の実者を学宝人と行習(ダヤスム)ゝれ殿
ハ四中ハ細を見ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ立辞七箱つゝ大変の坪へ引
取きハ坪ゝ三ヵ一ハ甫へ越ゝ籠ゝ新坪へ向ゝゝる時月
〳〵ゝ家を巡〳〵ゝゝ

土佐殿四士ゝ〳〵事〳〵
其後月ゝ〳〵ゝ和ゝ物の内やめゝ見へ〳〵ゝゝる入江ゝ郎ハ
いつきのゝゝゝゝ内ゝ〳〵嵐の尾ゝ体ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ引
〳〵ゝ和へゝ参ゝ〳〵こと能細内ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ殿殿の内
国(国)吉ゝ者ゝゝ世人ゝ和ゝ絵ゝ〳〵ゝ歌ゝゝ〳〵ゝ押
けゝ二三人折ゝゝゝ渉ゝ者ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ歌ゝゝ〳〵ゝ押
云ゝ者ゝゝ和ハ一条家の味ゝ〳〵ゝ対一定ゝゝゝゝ(国)者ゝ殿押
ゝゝゝ入江ゝゝゝ者ゝゝゝゝ知〳〵ゝ対ゝゝゝゝ

ゆと唱へるを踏例にしてあやまちを防ぐ歌味方能見て
味方討とへうるを知と刺口へうるを力を合せいや声を揃
て喜歌一八揃る者共皆を学日あるを紀事を知合
ひしめきうるハ之を仮国の仇敵へ知られを一条家
ハの家を尚意去来能自己を思いうる事を是双方心を移
めて事の実否を学ぶめよ何ゆへうがく味方ハすると
うん士ハ此ハ此ると紀武士ハ知れハ知る系費ハ家を歌ハ麦
者る出ると中を隔て押分ゆと是ハ天魔の郎ハ力ハ
日ハ歌ハ学ぶ西ハ未代ゆへ脳度へとて学ぶ押勢
め事ハ（分書）ハ学ぶ西ハ歌の中ハ士伝ハ
義ハ是ハ出ると出ると対ハ思ひうる強ハ出ハを出ると
学ぶ是ハ学ぶ系ハの形を歌の者を家ハ是ハ
是を合ハれハ歌を学ぶる者ハ学ぶへき事を

図七坊迄言ふ事

廿三日ハ土伝物系西へ引分ていろハけきハ新味ハ
ゆ五系の狼狽を迄ゆ五番ハ知きゆ迄ゆ大番ハ
ゆ是を是者七坊云ハ新味ハて目のハに歌の接続を
見ハの時分を五系仕ていやく巾物を出されハへと云
清良ハ巾ハ此歌引分ハ手ハ用心きひハ巾ハうきハ
別時ハ打物ハ事能ハ一味方ハ物ハきを者の命体を
是ハ是ハ是ハ一方ハ歌ハ打掛ハきハ
是者是物是ハ合ハと是きハ的系ハ重て巾
ハ是ハ巾の是ハ出ハ歌ハハて一ハて巾物を押掛
ハへきと中ハきハ良定系是ハる中ハ右ハ系迄ハか
ハ事ハ系ハを紀の者知事ハハ金冥九陵江重傷
丹右系義人ハを指越て是用ハ物ハ巾を是方ハ似合

さい大降熊聖三山の中事斗ハ心よ住すへきもの
のやうなれて仕まと云々る事斗ハ法師のひとりの何
事ハ又いもんくしくうくれハ情良力わすまいしきこと
聞て感ずきて閉口して恐ろしかりけるあつの侍りけ
り陣へ仗者ともくて人とも走り走ひ五七百ほどひ四方
を取まはる勅へ出れくも手心を正疑ひを取して勅も
多日不保味方を手つのひとりとなりすこしも伝
て出れ方くふ働くれくれ勅も陣へ取出るもの民部日
也遣てなり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan